

学び方も学ぶ領域も子どもに委ねることで「個別最適な学び」を実現

事例1～3では、教科学習、探究学習、特別支援において、「個別最適な学び」をどのように行っているのか、教員の実践と教育委員会の支援を見てきた。ここでは、中央教育審議会の教育課程部会の委員を務めた上智大学の奈須正裕教授と、「個別最適な学び」を意欲的に推進する茨城県水戸市教育委員会が語り合い、「個別最適な学び」の本質を改めて確認するとともに、その実現に向けて、教員や教育委員会に何が求められるのかについて、互いの考えを出し合った。



上智大学
総合人間科学部教育学科
教授
奈須正裕

茨城県 水戸市教育委員会 総合教育研究所
教育研究課
副参事兼課長補佐(学力向上担当) 矢口智之
教育研究課情報教育係
係長(ICT推進担当) 高松剛

※プロフィールは、取材時(2022年3月)のものです。

根底にあるのは、子どもの成長発達権、学習権の保障

— 2021年1月に公表された中央教育審議会の答申*1(以下答申)で、「個別最適な学び」が示された背景を教えてください。

奈須 「個別最適な学び」は、一斉指導の問題を解決するために、世界的には100年以上前から取り組まれてきました。背景には、子どもは一人ひとり異なり、その多様性がむしろ発達や学習の源泉になるといった考え方があります。学習が成立しないのは子どもの側の責任ではなく、カリキュラムや環境の方に問題があるという

考え方です。その根底には、すべての子どもに対して基本的人権としての「成長発達権、学習権」*2を全面的に保障するといった思想があり、それは答申にも通底しています。

実際、一斉指導で子どもの多様なニーズに応えるのは困難です。例えば、「5分間でこの問題を解いてみよう」と言って問題に取り組ませた場合、5分間で解答できなかった子どもは中途半端な状態で学びを断念させられます。逆に、早く解き終えた子どもは待ち時間が無駄になり、貴重な学習時間を奪われたこととなります。全員が横並びでできるようになることに価値が置かれると、子

どもの能力や特性に応じた学習環境を提供することは難しいのです。

「2つの得意」から成る「学習の個性化」

矢口 確かに、先生方の中には教えたい内容を伝えることに満足し、「子どもがどこまで理解しているのか」「どのような力がついたのか」といったことに、十分に意識が向いていない方もいるかもしれません。教育委員会として、まずは教員の意識を変えることが必要ですね。

奈須 教員の意識改革をしっかりと行うためには、「個別最適な学び」の本

*1 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)。

*2 成長発達権は、成人するまでの成長が援助・保障される権利。学習権は、学習環境や学習条件など、教育を受ける学習者の学習の自由が保障される権利。

質を正しく理解してもらうことが大切です。答申が示した「個別最適な学び」の土台には、「指導の個別化」と「学習の個性化」という2つの観点がありますが、「学習の個性化」は、さらに「学び方の得意」「学ぶ領域の得意」といった「2つの得意」で言い表されます(図1)。

この「2つの得意」を伸ばすために大切なことは、一人ひとりの子どもに合った教材や学習時間、学習方法が豊かに、柔軟に提供される環境をつくること、そして、子どもが自らそれらを試してみることです(図2)。
矢口 それぞれの子どもに応じて学び方や学ぶ領域を選択するという考えは、その通りだと思います。本市では、「チャレンジプラン」(図3)において、すべての市立小・中・義務教育学校に「学力向上サポーター」を配置し、習熟度に応じた学習や少人数の学習指導を行っています。また、水戸市総合学力調査を実施して、学力と生活実態との関連を分析し、各学校が指導の内容や方法の工夫・改善を行えるよう、教育委員会から助言をしています。

奈須 少人数指導や習熟度別授業も、教員がよかれと思うことに子どもが取り組むだけだとしたら、「個別最適な学び」として必ずしも十分であるとは限りません。子ども自身の意思で行っている学びではないからです。

子どもは、自分で選び、行動する中で、うまくいったり、いかなかったり、好きだと思ったものが長続きしなかったり、苦手だと思っていたことが案外できたりするといった経験をします。そうした試行錯誤を通して、自分の「2つの得意」を見いだしていくことが、答申の柱でもある「自立した学習者」になるために重要であり、本人のキャリア形成にも大きく影響していきます。

図1 奈須教授による「個別最適な学び」の2つの観点

指導の個別化

多様な子どもたちが、共通の学習内容を身につけるために、一律の学習環境を与えるのではなく、その子どもに合った学習教材や学習時間、学習方法を提供すること。

学習の個性化(2つの得意)

- **学び方の得意** 同じ学習内容でも、この方法なら上手にできる、気持ちよく取り組めるなど、個に応じた思考の形、時間で行くこと。
- **学ぶ領域の得意** 好きな教科や将来の夢につながる分野など、一人ひとりに応じた学びの領域に、思う存分取り組むこと。

※取材内容を基に編集部で作成。

図2 「個別最適な学び」を行う際の留意点

- 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に、子どもの成長やつまづき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子どもが自らの学習状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。
- その際、ICTの活用により、学習履歴(スタディ・ログ)や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教員の負担を軽減することが重要。

※中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)を基に編集部で作成。

図3 水戸スタイルの教育「チャレンジプラン」(抜粋)

確かな学力の定着	学力向上サポーター	全小・中・義務教育学校に非常勤講師等を配置し、習熟度に応じた学習や少人数の学習指導など、子どもの実態に即した指導を実施。
	水戸市総合学力調査	「全国学力・学習状況調査」の対象学年ではない小・義務教育学校4・5年生、中学1・2年生(義務教育学校7・8年生)に実施。子ども一人ひとりが、自身の学力や学習方法のよしあしを把握し、今後の学習に生かすことで、「確かな学力」の定着を図る。
	家庭学習の充実	小・義務教育学校1年生の全家庭に、家庭学習の方法をまとめた「家庭学習のすすめホップ!ステップ!ジャンプ!」を、小・義務教育学校4年生に「家庭学習スタートノート」を配布。望ましい学習習慣の定着を図る。
自ら学ぼうとする意欲の育成	放課後学力サポート事業	全小・義務教育学校で、地域住民や大学生のボランティアが、放課後等に児童生徒の自主学習を支援。学習習慣の定着と学力向上を図る。
	数学・学習相談「SPOT in MITO」	中学2・3年生(義務教育学校8・9年生)の希望者に、冬季休業中、大学生等のボランティアによる数学の個別指導を実施。

※水戸市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

1回の授業で学びを完結させず、単元を通した学びを意識する

——「個別最適な学び」の実現が難しい要因は何だとお考えですか。

矢口 教員の多くが、45～50分間の

授業の中で学びを完結させることや、1年間の教育課程を終わらせることに重きを置いているからではないでしょうか。学校現場が「個別最適な学び」の本質を理解できるように、教育委員会として十分に提案できて



なす・まさひろ 専門は、教育方法学、教育心理学、カリキュラム論。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会、総則・評価特別部会などで、新学習指導要領の策定にかかわる。『個別最適な学びの足場を組む。』（教育開発研究所）など著書多数。

いないのかもしれませんが。

奈須 「個別最適な学び」について、「一斉指導の中で、個別化された場面を設ける」といったイメージを持たれている先生が多いのかもしれませんが、決してそうではありません。「個別最適な学び」のヒントは、従来の指導の中にあります。図画工作科や生活科の授業を思い出してみてください。45分間の授業で学びが完結することはなく、活動が始まれば4～5時間、子どもはそれぞれのペースで自由に学びを進めていますよね。その手法を国語科や算数科などの授業でも行えばよいのです。

大切なのは、一つひとつの授業が単元の中にどのように位置づいているのか、教科の見方・考え方を育てるためにその授業がどのような意味を持っているのかを意識して、1単位の授業を設計することです。

矢口 授業中、自分が話していないと不安になるという教員は多いと思いますが、子どもにもっと学びを任せようということでしょうか。

奈須 そうですね。子どもが教員の説明を聞き、教員の指示通りに活動し、45～50分間できちんと終わるのが授業であるという固定観念をいったん脇に置いてみましょう。そして、授業開始の本鈴が鳴ったら、子どもがそれぞれ自分の課題に取り組み、それぞれのペースで進め、終鈴で手を止めるという授業を思い浮かべてみてください。

教員がしっかりと単元の授業を設計し、子どもにその単元のゴールと学ぶ内容、学びの手順、使えるツールなどを伝えた上で学習に臨ませます。途中の学び方が、子どもによって異なっても、最終的に全員がほぼ同じ内容を習得し、到達目標に達していればよいのです。そうした「個別最適な学び」では、子どもが実際に頭や手を働かせて学ぶ時間が全体の91%にもなり、効率よく着実に学べるのが、旧・国立教育研究所の研究で示されています。

子どもは生まれながらにして有能な学び手

— 子どもに学びを委ねた場合、教員はどのような役割を担うのでしょうか。

奈須 子どもに学びを委ねて、一斉指導の時間が減った分、つまりいている子どもに寄り添うなど、ゆとりを持って一人ひとりに丁寧にかかわることができるようになります。教員の教授ではなく、子どもの学習を中心にする発想の転換が必要です。

子どもは、教員が教えなければ学べない、学ぼうとしないと思っていますとしたら、それは大きな誤りです。資質・能力を基盤とした学力論は、「子どもは有能な学び手＝アクティブ・ラーナー」であることを前提としています。「子どもは有能な学び手である」という前提で授業を見直し、さ

らにそれを洗練させる経験を提供することが資質・能力を育む教育につながるという認識を持って、「個別最適な学び」の実現に取り組んでいただきたいと思います。

1人1台端末の活用によって、より「個別最適な学び」へ

— GIGAスクール構想による1人1台端末は、「個別最適な学び」においてどのような意味を持ちますか。

奈須 これまでの授業では、知識や情報のほとんどは教員を介して子どもに伝達されました。1人1台端末が整備されたことで、教員の助けを借りずに、子どもが自分に必要なタイミングで様々な情報にアクセスし、容易に情報を収集・共有できるようになりました。「個別最適な学び」を行いやすい環境になったのですから、教員が子どもに端末を使わせるのではなく、子どもが自由に使えるよう



やぐち・ともゆき 学力向上担当。茨城県の公立小学校の教頭を経て、2019年度から現職。

茨城県水戸市プロフィール

人口 約27万人 面積 217.32km²
市立学校数 小学校32校、中学校15校、義務教育学校1校 児童生徒数 約1万9,300人 教員数 約1,400人

にすることが重要です。

高松 本市では、2021年度から「みんなでGIGAスクールプロジェクト in Mito」（図4）を立ち上げ、各学校と連携しながら授業におけるICT活用事例の共有や、「水戸市GIGAスクールサイト」の充実を図っています。各学校長から「GIGAスクールプロジェクトリーダー」を推薦してもらい、推進担当になってもらうほか、ICT支援員10人を市内すべての小・中・義務教育学校に派遣しています。

ICTの活用によって捻出された時間は、デジタルドリルに取り組む時間に充て、教員はつまづいている子どもの個別指導にあたるよう推奨しています。また、学習履歴を分析し、学級全体で理解が不十分な分野を見い出して授業改善につなげたり、児童生徒一人ひとりの課題に対応した個別支援につなげたりする体制も整えました。

奈須 1人1台端末の活用で気をつけたいのは、子どもが端末を使用す

る場面を、教員ができるだけ限定しないことです。分からない言葉があったらすぐに国語辞典で調べると同じように、子どもが自分のタイミングで端末を使い、いつでも必要な情報にアクセスできるようにしておきましょう。端末は、子どもの文房具であることを忘れてはなりません。

高松 教育委員会としては、子どもが文房具の1つとしてICTを安心・安全で自由に使えるよう、セキュリティのバランスを取ることや、ソフトウェアの充実などが大切だと思っています。

一方で、ICTに不慣れな教員がいるのも事実です。そこで、まずは教員が授業でICTを効果的に使えるよう、教科や単元、指導場面に応じたソフトウェアの活用方法をマニュアル化しました。子どもがICTを使う場面を限定してしまうことにつながりかねませんが、まずは教員や子どもがICTの便利さを実感できるようにした上で、さらに高い次元の「個別



たかまつ・つよし ICT推進担当。茨城県の公立中・義務教育学校の教諭を経て、2019年度から現職。

最適な学び」での効果的な活用を目指していこうと考えています。

1人1台端末を整備してから1年間で、教員が子どもに学習ツールを選択させる場面は増えました。例えば、発表の際に、紙を使う子どももいれば、プレゼンテーションソフトを使う子どももいるなど、各自が進めやすい方法を選択する姿が見られます。デジタルドリルでは自分のペースでどんどん先に進む子どももいて、先ほどお話にあった「2つの得意」に近づいていると感じています。

矢口 1人1台端末によって、家庭学習も変わってきています。端末の家庭への持ち帰りを学校に任せるところ、多くの学校でドリル学習や授業のまとめなど、発達段階に応じて端末を使った宿題を課しています。家庭学習は自分のペースのできるので「個別最適な学び」が実現しやすく、ICTの活用による相乗効果が期待できると考えています。

奈須 ある小学校では、授業の振り返りを自宅で行っています。授業の最後の数分間で慌てて振り返るのではなく、家庭で、自分がかけたい時間だけかけて振り返るのです。分かっ

図4 水戸市「みんなでGIGAスクールプロジェクト in Mito」

GIGAスクールプロジェクトリーダー事業	(1) ICTを活用した授業実践例 (2) オンライン授業における実践例 (3) 家庭学習における端末活用例 (4) ICT活用推進体制づくり (5) 学校におけるICT活用のきまりや運用 水戸市GIGAスクール構想サイトへの掲載
みんなで作る実践事例集事業（活用事例の提供）	(1) 授業実践例の提供 市内の教員が授業等におけるICTを活用した実践例を提供 (2) 授業実践例の周知 水戸市GIGAスクール構想サイトへの掲載
家庭学習等のための端末持ち帰り事業	(1) 臨時休業等への対応に向けた実践（全校） 持ち帰りによる家庭のネットワークへの接続練習 (2) 家庭学習での活用 実践校の募集→実践→課題の集約→全校での実施
ICT支援員による校内ミニ研修事業	○ 各学校からの要望に応じた研修内容を1コマ30分程度で実施
EdTech活用事業*3	○ 教育における先端技術の活用 補助事業を利用し、活用したい教育コンテンツ（企業）を実践校が選択して実施

※水戸市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

*3 ICTを活用した教育ビジネス、サービス、スタートアップ企業などの総称であり、経済産業省の補助事業により、2021年度の利用が無料だった。

図5 水戸市「教員のICT活用の目標」

Stage 1 2021年度

【一斉、個別活動における活用】

【臨時休業時における活用】

- ①大型提示装置への教材の提示
- ②インターネットによる調査活動
- ③カメラによる撮影
- ④AIドリルの活用
- ⑤ウェブ会議システムの接続方法

Stage 2 2022年度

【協働学習や話し合い活動における活用】

- ①授業支援ソフトの活用
 - 意見の共有
 - 協働による資料作成 等
- ②アンケート機能の活用
 - 振り返り
 - 定着状況の確認 等

Stage 3 2023年度

【学習データ（ログ）の活用】

- ①AIドリル等の学習データを活用して児童生徒の理解度を把握し、学習指導に生かす
- ②蓄積された学習データ（児童生徒の成果物等）を学習指導に生かす

※水戸市教育委員会の提供資料を基に編集部で作成。

たつもりになっていたことが、じっくり教科書を読むことでより深い理解に達することもあります。家庭学習をいかに活用できるかも、「個別最適な学び」を実現する大きなポイントになると思います。

教員が隣になくても、自分で課題解決できる力を育む

——特別支援教育でも、「個別最適な学び」が重要になります。留意すべき点を教えてください。

奈須 特別支援教育には、「個別最適な学び」に関するノウハウが数多く蓄積されています。視覚優位、聴覚優位など、子どもの特性に合った教材や支援の方法が明らかになっています。膨大なノウハウを基にすることで、個別支援計画が立てやすく、実際、それでうまくいくケースは少なくありません。ただそれも、教員が考えた学習に、子どもがただ取り組むだけでは、子どもの自立を促す方法として、やや疑問を感じます。

高松 特別支援学級の児童生徒に対しては、タブレット端末に十数種類の学習支援ツールを入れて、一人ひとりに合った学び方を選べるよう配慮しました。教育委員会に申請すればデイジー教科書*4を利用することも可能で、文字が苦手な子どもでも

教科書を読むことができるようにしています。

奈須 そうしたノウハウの活用によって、普通学級の子どもにとっても学びやすい環境を構築できることが分かってきました。

特別支援教育に限らず、学ぶ主体は子どもです。すべての子どもはいざ、教員がいない「社会」に出て行くことになります。何か課題にぶつかったら、それを解決するために、自分に合った方法や道具を選んだり、自分で必要なサービスにアクセスして情報をつかんだりできるようにしていかなければなりません。自分で考えた方法や選んだ道具を使って学習課題に取り組み、その経験をほかの場面でも生かせる力を育むことが必要なのです。そのためには、子どもが自ら試して、なぜうまくいったのか、いかなかったのかを考える経験を積ませることが大切だと思います。

矢口 特別支援学級では少人数指導を行っていますが、教員が計画した学びに子どもが取り組むといった、教員主導となっていることは否めません。これまで以上に子どもや保護者と話し合い、子どもに寄り添いながら選択肢を示し、主体性を引き出すような指導を目指していく必要がありますね。

——「個別最適な学び」を実現するた

めに、全国の教育委員会は何に力を入れるとよいでしょうか。

奈須 先生方が「個別最適な学び」の実践をイメージできるようになることが、まずは大事だと思います。そのためには、指導主事が質の高い授業を見つけ、「個別最適な学び」の要素を吸収して、現場の先生方に伝えていくとよいでしょう。そうした学びを実践できている学校は、私が知る限り、日本国内に十数例あるかどうかですから、時間を捻出して視察することをお勧めします。

そして、指導主事は教員と一緒に考えて、授業づくりをしてみてください。ある教育委員会では、「個別最適な学び」の担当課を立ち上げ、指導主事が各学校を訪れて、教員と一緒に指導案を作成しています。単元構成や教材、学習環境などについて、教員が指導主事と相談しながら授業づくりをし、試行錯誤をする中で見えてくるものがあるはずです。

高松 本市でも、「個別最適な学び」のさらなる充実に向けて、AIドリル等で蓄積された学習データを個別指導に生かしていく予定です（図5）。私たち教育委員会が「個別最適な学び」の本質を捉え、示しながら、これまで以上に現場の先生方とともに作り上げていきたいと思っています。
——本日はありがとうございました。

*4 教科書の内容をデジタル化して、パソコンなどで文字の拡大・色の強調、音声再生などを同時に行える教材。